

地域遺産としての広村堤防の現状と地域社会の意識

片柳 勉* 田島 遥名** 古川 恵**
辻 亜里沙** 井川 美奈** 大芦 香織**

キーワード：広村堤防、津波、地域遺産、意識、和歌山県

1. はじめに

地域にはその歴史や風土を象徴するような事物が存在し、地域アイデンティティの形成に大きく関わっている。そうした事物のうち、視覚対象となる構築物に焦点を合わせると、当初から象徴性を持たせて造られたものと、実用的に造られながらも時代の流れのなかで役割を終え、新たな機能を担わされたものがある。たとえば、大阪万博跡地にある太陽の塔に代表されるモニュメントは前者にあたり、原爆ドームは後者の例といえよう。また、近世城下町における天守は政治の中心がそこにあることを示す象徴であったが、現在では本来の象徴性は失われ、観光資源の一つとなっているケースがほとんどである。

橋梁や堰堤、港湾などの土木施設は、その存在感ゆえに地域の歴史の象徴となるものもある。関東大震災の記憶を伝える隅田川の永代橋や、広島県呉市にある戦艦大和の建造ドック跡などはその例であろう。近年、こうした土木施設を都市や地域の記憶を伝えるものの一つとしてとらえ、まちづくりに活かそうとする自治体も見られる(海道, 2006)。津川(2003)は、群馬県旧宮城村における「ふるさと創世事業」を取り上げ、送電線の鉄塔が行政によって村のシンボルに位置づけられたことを紹介している。しかし、村民が鉄塔を地域のシンボルとして認識しているかは不明である。建築物に比べ、土木施設は都市部から離れて立地するものが多いためか、それらに対する地域住民の意識や施設の象徴性について分析した研究は乏しい。

本研究で対象とする和歌山県広川町にある広村堤防は、防災機能を有する土木施設の一つであり、また、国の史跡に指定されるなど、文化財的価値を有する土木遺産である。その一方で、第2次大戦以降に広村堤防付近の港湾では整備が進み、広村堤防の防災施設としての役割は

以前よりも小さくなったかのようにも見える。しかし、広村堤防が津波災害を教訓として建設され、その後の津波の被害を最小限に抑えたことは紛れもない事実である。地域の人たちは広村堤防に対してどのような意識を持っているのか。本研究では、広村堤防は単なる防災施設から地域の象徴的なモノへと変化しているのではないかとの仮説のもと、広村堤防を取り巻く環境の変化と、堤防に対する地域社会の意識の一端を明らかにすることを目的とする。

本研究は、以下の手順で進める。まず、広村堤防とその周辺地域の環境変化を、地形図の判読および景観観察により分析し、特に国土開発が進展した第2次大戦以降の変化を明らかにする。次に、広村堤防に対する地域社会の意識を、各種文献資料の分析、アンケートおよび聞き取り調査により明らかにする。以上の結果を踏まえ、地域における広村堤防の位置づけを考察する。現地調査は2006年11月に実施した。

2. 広村堤防の建設と堤防周辺の景観変化

(1) 浜口梧陵による堤防の建設

広村堤防のある広川町は和歌山県の北西部に位置し、1955年に広町(旧広村)・南広村・津木村が合併して成立した人口約8千の自治体である(第1図)。町内を北西に向かって流れる広川に沿って低地が広がり、小集落が点在する。町の主産業は農業であり、主に温州ミカンを中心とした柑橘類が栽培されている。

広川町の中心集落である広地区(旧広村)は広川河口の左岸にあり、湯浅湾に面している。広地区はV字型の湾奥に位置しているため、これまで度々津波の被害を受けてきた(第1表)。なかでも1707(宝永4)年に発生した南海地震の津波では、家屋流失700軒、死者300人に

* 立正大学地球環境科学部

** 立正大学学生

第1表 広村堤防関連略年表 (15世紀以降)

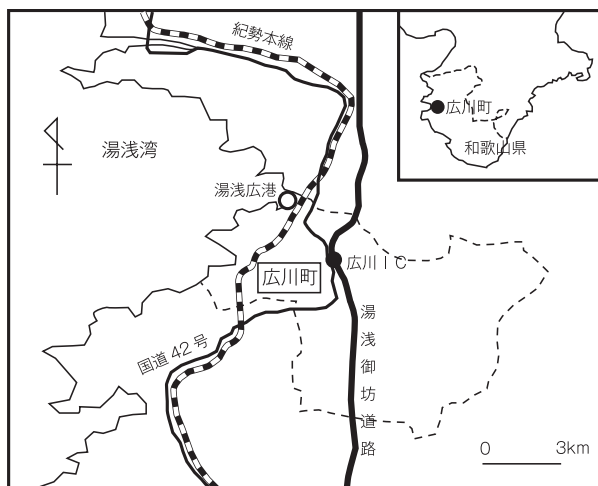
年	事 項
15世紀	畠山氏が広湾沿いに防浪石堤を築く。
1605	慶長南海地震・津波
1707	宝永南海地震・津波 (死者約300名、家屋流失約700軒)
1820	浜口梧陵が広村に生まれる。
1854	安政南海地震・津波 (死者36名、家屋流失125軒)
1855	浜口梧陵が広村堤防の建設に着工する。
1858	広村堤防が完成する。
1885	浜口梧陵がニューヨークで客死する。
1897	ラフカディオ・ハーンが「A Living God」を執筆する。
1903	第1回目となる「津波祭」が開催される。
1933	広村堤防に感恩碑が建立される。
1937	中井常蔵の「稲むらの火」が小学国語読本に掲載される。
1938	広村堤防が国指定史跡となる。
1946	昭和南海地震・津波 (死者22名)
1951	広湾護岸改修工事が開始される (1961年に完成)。
1955	広町・南広村・津木村が合併し広川町が発足する。
1988	広川河口に「なぎ大橋」が完成する。
1993	湯浅広港津波防波堤整備事業が開始される (2010年に完成予定)。 広湾埋立事業が着工される (1995年に完了)。
1997	広川町役場新庁舎が完成する。 広湾埋立地住宅地の分譲が開始される。
2002	第1回「稲むらの火祭り」が開催される。
2007	稲むらの火の館が開館する。

資料：広川町資料により作成

および被害を受けた。また、1854 (安政元) 年の地震によって発生した津波でも、家屋流失125軒、全壊10軒、半壊46軒など、総計339軒の家屋の被害を受けた。安政の津波の様子については、「安政元年海嘯の実況 (濱口梧陵手記)」に詳しく記録されている (広川町文化財保護審議委員会・広川町教育委員会, 2005, p26)。

安政の大地震によって発生した津波の高さは5mを超えるもので、15世紀に築かれた防浪石堤を乗り越え、村に大きな被害をもたらした。当時たまたま広村に帰郷していた浜口梧陵¹⁾は、被災直後、津波にのまれた漂流者に安全な場所を知らせるために道端の稲むらに火を放ち、多くの人命を救った。後に、ラフカディオ・ハーンがこの出来事に着想を得て短編小説「A Living God (生き神様)」を執筆した。さらに、この小説に感銘を受けた中井常蔵が教材として「稲むらの火」を書き下ろし、1937年に尋常小学校第5学年用国語読本に掲載されることになった。

浜口梧陵は大津波の再来に備えて、被災からわずか3か月後に巨額の私財を投じて堤防の建設を始めた。その際、津波によって職を失った村人を雇うことにより、荒廃した村から住民が離散することを防いだ。広村堤防は広川河口の南に伸びた海岸沿いにあり、1938年に国の史跡に指定されている (写真1)。堤防は海側から内陸に向かって、石堤・クロマツ防潮林・土堤の三段構えとなっている。石堤は中世に畠山氏が築いたもので、第2次大戦後の改修工事により現在はコンクリートで補強されて



第1図 研究対象地域



写真1 港側から見た広村堤防(防潮林が南北に伸びる)

いる。内陸側の土堤は、浜口梧陵が1858(安政5)年に当初の計画の3分の2の長さで完成させたもので、斜面には堤防強化のためにハゼの木が植樹され、あわせて土堤の海側に防潮林としてクロマツが2列に植えられている。広村では、1946年の南海大地震の際に4mの津波に襲われたが、堤防が海水をくい止め、堤防内では一部の民家が浸水した程度であった。しかし、堤防の外側での被害は大きく、22名もの死者を出してしまった(広川町, 1998)。

(2) 広村堤防付近の景観変化

広村堤防は全長約600m、根幅が約20m、高さ約5mの緩傾斜式防潮堤である。現在の堤防の状況を見ると、土堤の改修工事により外側の斜面がコンクリートで被覆され、さらにその上が土砂で覆われている。天端部分の幅は約2mあり、徒歩で通行することが可能である。広村堤防には2か所の切り通しがあり、堤防の北端から220m南のところにある切り通しには、1926年に赤門と

呼ばれる防潮扉が設置された。現在の赤門は1980年に設置されたものである(写真2)。もう1か所の切り通しは堤防南端から80m北、耐久中学校北東側にあるが、ここには防潮扉は設置されていない。

広村堤防の整備・管理状況をみると、赤門から北と南とでは異なっている。北側部分はコンクリートの被覆が露出した箇所が見られ、一見するとコンクリート造の堤防のようにも見える(写真3)。また、堤防内側が住宅とすぐに接しているためか、斜面に野菜が栽培されている箇所や雑草が茂った箇所などが散見され、管理が不十分な状況にある。一方、赤門から南側は植栽の手入れが行き届き、広村堤防が国指定史跡であることを示す案内板が設置されるなど、史跡公園らしく整備・管理されている(写真4)。

次に、広村堤防周辺の景観変化について見ることとする。第2図と第3図は、それぞれ1968年と2006年の広村堤防付近を示した地形図(一部加筆)である。両図を比較すると、約40年間に堤防の内側と外側とでは景観の変



写真3 広村堤防の北端付近(右手が海側)



写真2 「赤門」と呼ばれる防潮扉



写真4 広村堤防の南側部分(右手が海側)



第2図 広村堤防とその周辺地域 (1968年)

資料：1/25,000地形図「湯浅」1968年修測 (一部加筆)



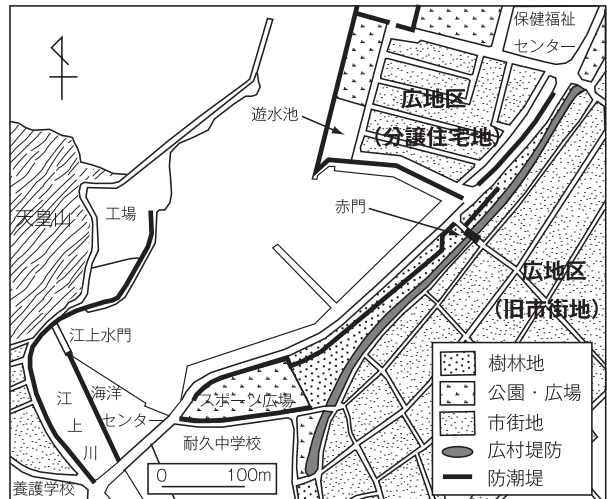
第3図 広村堤防とその周辺地域 (2006年)

資料：1/25,000地形図「湯浅」2006年更新 (一部加筆)

化に大きな差が認められる。堤防内側ではほとんど変化が見られないのに対し、堤防外側の広川河口から堤防中央付近の突堤にかけて広がっていた砂浜海岸 (天州ヶ浜) が、沖合に向かって300m以上にわたって埋め立てられたことがわかる。

堤防補強を含む広湾の護岸改修工事は1951年から進められ、1961年には一応の完成を見た (広川町誌編纂委員会編 a, 1974, p114)。その後、1993年から広湾の埋立事業が開始され、2年後に完成した。埋立地の南半分は広湾埋立地住宅地として1997年に分譲が始まり、現在では約40戸の住宅が建ち並んでいる。分譲住宅地の周囲は高さ約7mの防潮堤で囲まれ、津波の被害に備えられている。住宅地の北側に広がる埋立地には、旧市街にあった広川町役場庁舎が1997年に新築移転してきたほか、体育館・保健福祉センター・多目的広場などが建設され、町の防災拠点としての役割も果たしている。

現在、堤防から港の岸壁までの距離が最も短いところは赤門付近で、約50mとなっている (第4図)。1858 (安政5)年の堤防完成から110年を経過した1968年当時、堤防全体のすぐ近くにまで海がさまっていたが、その後の40年間に堤防の海側は大きく様変わりした。堤防を赤



第4図 広村堤防付近の土地利用 (2006年)

資料：広川町管内図および現地調査により作成

門から南に向かうにしたがい、海との距離はさらに広がる。1906 (明治39)年に現在地に移転してきた耐久中学校の校地の海側が埋め立てられ、町民ゲートボール場・少年スポーツ広場が設置されたためである。

湯浅広港の沖合約1kmのところでは、2010年の完成を目指して和歌山県により湯浅広港津波防波堤整備事業

が1993年から進められている。この事業は、湯浅側と広川側にそれぞれ長さ450m（幅10.0～10.4m）と400m（幅7.3～8.6m）の防波堤を築くというもので、昭和南海地震規模の津波に対応できるよう設計されている。

度重なる防災工事により、広地区における津波の脅威は以前より小さくなったと考えられる。しかし、近い将来に南海・東南海地震が発生し、広地区に津波が押し寄せてくるであろうこと、広地区の住民が堤防を目にしながらかつて暮らしていることに変わりはない。

次章では、広川町では津波災害の記憶がどのように継承されてきたのか、またその中で広村堤防がどのように位置づけられてきたのかを考察する。

3. 地域における津波災害の記憶の継承

広地区（旧広村）では、様々な事柄で津波災害の記憶が継承されている。広村の有志は津波50回忌に際して、その発生日の旧暦11月5日に村民が堤防への土盛り（堤防補修）を行うことを取り決めた（広川町誌編纂委員会編b, 1974, p699）。この行事は、安政の大津波で犠牲になった村民の霊をなぐさめるとともに、浜口梧陵ら郷土の偉人の遺徳をしのぶ「津波祭」として、現在まで継続して開催されている。現在の「津波祭」は上記の目的に加え、土盛りの行事に地元の小中学校の生徒も参加するなど防災教育・防災意識継承の意味合いも持ち、2008年には105回目をむかえた。また、広村堤防の完成から75年後の1933年には、浜口梧陵をはじめとする広村の先人の遺徳をしのぶために、堤防中央付近の海側に感恩碑が建てられ、「津波祭」の開催場所となっている。

津波災害の記憶は新たな形で継承されている。2002年から「稲むらの火」を再現するイベントとして「稲むらの火祭り」が開催されている。これは、広川町役場前の稲むら広場から広八幡神社までの約2kmを、広場で採火された松明を持った参加者が練り歩き、最後に神社に用意された高さ2mの稲むらを燃やすというものである。「津波祭」と同様に、浜口梧陵の功績をたたえ、防災意識を高める目的があるが、芸能ショーも行われ多くの参加者を集めている。なお、2008年からは「稲むらの火祭り」と「ふるさとまつり²⁾」が「梧陵まつり」と総称され、ほぼ同時期に開催されている。

広川町には堤防に関連する施設も造られている。2007年に開館した「稲むらの火の館」がそれで、浜口梧陵記念館と津波防災教育センターを併設した施設である。浜口梧陵記念館は広地区にあった西浜口邸を修復したもの

で、浜口梧陵の功績と教訓を伝える施設となっている。また、津波防災教育センターは文字通り防災教育の場となっている。このほか、広川町役場前の稲むら広場には、浜口梧陵が稲むらに火を放つ場面を表したモニュメントが設置されている。いずれも広村における津波災害の記憶を想起させるものである³⁾。

広川町では、2007年度から始まった国の「頑張る地方応援プログラム」に基づき、「ガンバ元気なまちづくり」を進めてきた。この事業では、「災害に強いまちづくりプラン」「いきいき支援プラン」「農業元気いっぱいプラン」「IT推進プラン」「稲むらの火継承プラン」の五つのプランを柱としている⁴⁾。このうち「稲むらの火継承プラン」の内容は、「稲むらの火」の出来事を後世に伝えるために「稲むらの火の館」を維持運営すること、防災教育をメインテーマとし、地域の活性化を目的として「梧陵まつり」を開催することとされている。

安政の大津波から約150年を経た2000年代に入り、広川町では行政を中心に過去の津波災害の象徴である広村堤防とそれに関わる事柄を地域資源として活用しようとする動きが見られる。津波の犠牲者の慰霊と郷土の偉人の遺徳をしのんで始められた「津波祭」と同時に「ふるさとまつり」が行われ、また一種の観光イベントともいえる「稲むらの火祭り」が新たに開催されるようになったことなどはその一例であろう。また、広村堤防や「稲むらの火の館」などをはじめとする浜口梧陵に関連する史跡や施設を巡る散策マップも作成されている。広川町では負のイメージを有する津波をまちづくりに活かし、同時に津波災害の記憶を継承しようとする発想の転換を見ることができる。

こうしたなか、広村堤防は津波災害に関する一連の行事や施設の中で、中心的な存在と位置づけることができる。それは、堤防が浜口梧陵の防災精神の表象であり、津波災害の記憶を想起させる重要な遺産であるからである。

次章では、広村堤防に対する地域住民の意識を、アンケートおよび聞き取り調査から明らかにする。調査では、広地区と上中野地区を対象に戸別訪問を行い、28名から回答を得た。対象とした広地区は広村堤防に隣接し、上中野地区は堤防の南東約1kmのところの位置する広八幡神社近くの集落である。なお、広地区は安政の津波の被害を受け、上中野地区は被害を受けなかった地区である。

4. 広村堤防に対する住民意識

初めに、広川町の住民にとって町のシンボルは何かについて質問した（第2表）。広川町のシンボルを「広村堤防」と回答した住民がもっとも多く、「浜口梧陵」「ミカン」「稲むらの火」が続く。津波そのものをシンボルと答えた住民を含め、津波に関連する事物が広川町のシンボルとしてあげられている。「広村堤防」とした回答が多いのは、私財で造られた堤防が津波から町を守ったという事実、津波防災に関連する各種の行事、そして何よりも視覚対象としての長大な堤防の存在そのものにあると思われる。

それでは広村堤防を、地域住民はどのように認識しているのだろうか。アンケート調査および聞き取り調査の結果から分析する。

「はじめて広村堤防に行ったのはいつか」との質問に対し、記憶にないとの回答を含め、ほぼ全員が幼少期から中学時代までの間に広村堤防に行ったことがあると答えた。堤防は、住民にとって早い時期から身近な存在であったことがわかる。

以下の質問に対しては、評定法（5件法）で回答を求めた（第3表）。まず、「なぜ広村堤防が造られたか知っているか」との問いに対しては4.46の評定点であった。広村堤防の存在理由は地域住民にとって自明のことのようなのである。ある年配の回答者によれば、小学校の道徳の授業で「稲むらの火」を学び、堤防について勉強したとのことであった。

「広村堤防を現状のまま保全すべきだと思うか」との質問に対しては4.70の評定点であった。ほぼ全ての回答

第3表 広村堤防に対する住民意識

質問項目	評定点
問1 なぜ広村堤防が造られたか知っているか。	4.46
問2 広村堤防を現状のまま保全すべきだと思うか。	4.70
問3 広村堤防を世界遺産（文化遺産）に登録したいか。	3.48
問4 これからも広川町に住み続けたいか。	4.68

資料：アンケート調査により作成

者が、現状のまま保全してほしいと考えている。しかし、「広村堤防を世界遺産（文化遺産）に登録したいか」との問いに対しては3.48の評定点にとどまった。現状のまま保全していきたいと思いつつも、世界遺産にまでは登録しなくてもよいのではないかと考えている人も多いようである。保全すべきかとの質問に対して5の評定点を与えたものの、この質問に対しては1の評定点とした回答者が3名見られた。

「これからも広川町に住み続けたいか」との問いに対しは4.68の評定点であった。湯浅町などの他自治体からの転入者を含め、回答者の年齢・居住年数による評定の差異は認められなかった。回答者の多くが広川町の住みやすさを実感し、また愛着を持っていることの表れといえよう。

次に、「広村堤防に対するイメージは何か」との問いに対し、自由回答で答えを求めた。回答結果を見ると、肯定的なイメージが並んだ（第4表）。堤防によって津波の被害を最小限に抑えられたことや、堤防という言葉から防災や人命救助などの良いイメージを持っているようである。広村堤防は、過去の災難である津波災害の記憶を想起させるが、住民は広村堤防に対して偉大さを感じていることがうかがえる。このことは堤防を建設した浜口梧陵に対する思いと重なるものである。

広村堤防に対する肯定的イメージは、「広村堤防に対する自由記入」にも表れている（第5表）。住民は広村堤防を大変誇りに思っており、この堤防をもっと世間にアピールしていきたいという意見もある。広村堤防は町のシンボルであり、地域住民はそれを造った浜口梧陵に対し尊敬の念を持っている。

広村堤防は、次世代に引き継ぐべき地域遺産としてとらえられている。また、広村堤防は地域の歴史を象徴するものであり、堤防に関連する事物とともに地域アイデンティティの形成に大きく関わっている。その証を今回の調査をとおして見ることができた。

第2表 広川町のシンボル

項目	人数
広村堤防	7
浜口梧陵	5
ミカン	5
稲むらの火	4
津波	3
自然（山・海）	2
旧耐久高校	1
祭（津波祭）	1
ホテル	1
ササユリ	1
オモト	1
魚	1

注）複数回答。 は津波関連事項。

資料：アンケート調査により作成

第4表 広村堤防に対するイメージ

1	昔の人がよくこれだけの堤防を作ったと思います。(40代男性、居住歴5年)
2	現在は整備されているが昔はあまり感じない普通の堤防。(40代女性、居住歴25年)
3	小さな堤防ですが昔人間が作った村を守るという偉大な事業だ。(40代男性、居住歴45年)
4	防災に役立つ。(60代男性、居住歴65年)
5	機械もないのによくつくれたなと思う。(10代女性、居住歴12年)
6	広小学校を卒業したのですが、小学校で大切にすべき物と教えられ、すごく誇りに思える物です。(10代女性、居住歴8年)
7	防災。(20代女性、居住歴1年未満)
8	松。(30代女性、居住歴約40年)
9	津波。(50代女性、居住歴30年)
10	世界一だと思う(人の命を救える。自分たちの祖先が作った)。(60代男性、居住歴36年)
11	ありがたい。役立つ(70代男性、居住歴70年)
12	あまりよくない/少しよくなってきている。(70代男性、居住歴70年)
13	町全体を守るため。(70代女性、居住歴73年)
14	人命救助。(60代女性、居住歴30年以上)
15	津波。(50代男性、居住歴3年)

資料：アンケート調査により作成

第5表 広川町・広村堤防について自由記入

1	私財を投じて後世の人の為、津波で家をなくした人々の為に動いた浜口梧陵という人間の大きさを感じます。(40代男性、居住歴5年)
2	県外等から見学にこられる方が多くボランティア、イベントごとがある。どの町にもある歴史的なもので、堤防を別にこれといって防災防災とさわがなくともいいように思う。昔からそこにあるのだから。ブームはいつか去り見学者も激減するだろう。どれくらいの人が心にとめておいてくれるだろうか。(40代女性、居住歴25年)
3	広村堤防を世界遺産に入れたいです。これからももっと浜口梧陵さんのことを学んでいきたいです。(10代女性、居住歴12年)
4	一個人の資産をつぎこんで作った堤防であるが、この時政治は何をしたのか。現在を見ても政治に期待がもてないが、今後このような人は出ないと思う。(60代男性、居住歴65年)
5	広村堤防がこれからも残っていくようにしたいです。火祭りや津波祭りなど、たくさん浜口さんについてのお祭りがあることはすごいことだと思います。来年完成する資料館にもいってみたいと思います。(10代女性、居住歴8年)
6	今のままで大切に。(50代女性、居住歴30年)
7	広村堤防を世界にアピールして、津波災害を少しでも少なくしていきたい。(60代男性、居住歴36年)
8	きれいにしていきたい。人にもっと知ってもらいたい。(70代男性、居住歴70年)
9	守るための堤防。ボランティアの方も来てもらって、保存していきたい。(70代女性、居住歴73年)

資料：アンケート調査により作成

5. おわりに

本研究では、広村堤防は単なる防災施設から地域の象徴的なモノへと変化したのではないかと仮説のもと、堤防とそれを取り巻く環境の変化を踏まえ、堤防に対する地域社会の認識について分析してきた。研究の結果は以下のとおりである。

広川町では、浜口梧陵が建設した広村堤防に加えて、広湾を埋め立て、津波進入を防ぐゲートを造るなど、町全体を災害から守るための工事を続けてきた。これにより、広村堤防は次第に海との距離を広げていった。広村堤防の周囲の環境は築造当時とは大きく変化した。

堤防とそれに関連する出来事を地域の活性化につなげる動きも見られるようになった。広川町では、負のイメージを有する津波をまちづくりに活かし、同時に津波災害の記憶を継承しようとする発想の転換を見ることができ

る。広村堤防は、これまでに広地区の旧市街地を津波や高潮から守ってきた。この点において、広村堤防が防災機能を有する土木施設であることに間違いはない。その一方で、広村堤防は浜口梧陵の功績そのものであり、津波災害の記憶を想起させるものでもある。住民は広村堤防に対して肯定的なイメージを持っており、地域の遺産と

してとらえている。

本研究では、広村堤防は単なる防災施設というだけでなく、地域を象徴するモノへと変わってきているとの仮説を検証することができたと考えている。さらには、堤防は地域のアイデンティティ形成に大きく関わっているとの結論を得た。

広川町では、町を災害から守るために現在でも工事を続けている。また、学校の授業で浜口梧陵を取り上げるなど、町全体で防災に対する意識が高い。過去に津波で多くの犠牲者を出した町ではあるが、それを乗り越え地域で生きていこうとする住民の力強さを見ることができ

注

1) 浜口梧陵は、1820(文政3)年に広村の浜口家分家の長男として生まれた。1831(天保2)年に、銚子でヤマサ醤油を興した浜口本家に養子として入り、1853(嘉永6)年に家督を相続した。1880(明治13)年に初代和歌山県議会議長となり、1885(明治18)年ニューヨークにて客死した。

2) 第1回の「梧陵まつり」となる2008年11月に開催された「ふるさとまつり」では、「津波祭」のほかに商工祭、餅投げ

- 大会、ゲートボールなどのイベントが組まれた。
- 3) 災害被災地では、その記憶を次世代に伝えようとするところが見られる。小川 (2002) は、兵庫県旧北淡町にある阪神・淡路大震災で形成された断層や損壊した家屋を保存・公開する施設は、震災の記憶を保存するものであるとしている。
- 4) 下記の総務省ホームページを2009年1月29日に閲覧。
<http://www.soumu.go.jp/ganbaru/project/h20pdf/303623.pdf>

文 献

小川伸彦 (2002) : モノと記憶の保存. 荻野昌弘編 『文化遺産の社会学 - ルーヴル美術館から原爆ドームまで』 34 - 70. 新曜社.

海道清信 (2006) : 「都市の記憶を伝えるモノ」を活かすまちづくり - 東海4県における実態調査から -. 日本建築学会大会 学術講演梗概集 (関東).

津川康雄 (2003) : 『地域とランドマーク - 象徴性・記号性・場所性』 古今書院.

広川町 (1998) : 『稲むら燃ゆ - 海嘯と闘った男・浜口梧陵の奇跡』 広川町.

広川町誌編纂委員会 a (1974) : 『広川町誌上巻』 広川町.

広川町誌編纂委員会 b (1974) : 『広川町誌上巻』 広川町.

広川町文化財保護審議委員会・広川町教育委員会 (2005) : 『濱口梧陵小傳』 広川町.

The Condition of the Hiromura Levee as Regional Heritage and the Consciousness of the Community

KATAYANAGI Tsutomu*, TAJIMA Haruna**, HURUKAWA Megumi**

TSUJI Arisa**, IKAWA Mina**, OHASHI Kaori**

*Faculty of Geo-environmental Science, Rissho University

**Undergraduate of Rissho University

Keywords: Hiromura Levee, Tsunami, Regional Heritage, Consciousness of Community,
Wakayama Prefecture